

# バーナード・マラマッドの『アシスタント』 における自己改革

## The Self-Reform in Bernard Malamud's *The Assistant*

木下 高德

### 概要

すべてを物質やサービスの交換価値によって計ろうとする資本主義経済の社会は、そこに住む人間より人を愛する資質を奪う傾向がある。資質とは良心、忍耐、勇気、規律であるが、人間は愛し合い、平和なユートピアの社会を建立するためには、かつて所有していたが今は喪失してしまったそれらの資質をとり戻さなければならない、とマラマッドは『アシスタント』で説いている。

Key Words: Malamud, Assistant, Love, Jew, Francis.

I

成人した人間の性格というのは、大幅な変革が可能なものであろうか？ 可能だという意見の人もいるであろうし、大人に成長してしまつてからでは不可能だという意見の人もいよう。バーナード・マラマッドは前者に属する楽道家である。彼の描く小説の中には性格を大幅に変革し、したがって生き方を革新的に変えていく人間を主人公にした小説が何編かあるからだ。

たとえば強盗の罪を犯した二十代半ばの男がここにいとするとする。この男が強盗の一味であつたことを知っている他人は、この男が短期間のうちに完全なる善人に変身したことを信じることができようか？ できるとして、どれほどの期間この男の善行の連続を目撃することが必要であろうか？ またこの男が強盗より変身したとして、どれほどの幅の善人への変身を信じることができようか？ マラマッドはこれらの困難な疑問を解決するために、こういう種類の小説において、或る特殊な情況に主人公を置くことで、人間の大幅な変身を可能だと信じさせようとしている。

古来物語の世界では、悪人が何かのきっかけで罪を悔い善人に変革を遂げるといふ勧善懲悪の物語りが、書き継がれ読み継がれてきてはいる。しかし神不在の現代では、善人に見えた人間が突然悪人に変身する事件を見聞きするのを日常茶飯事とする現代では、大衆小説でない限り、一見善人に見えた人間が実は悪人であつたという正体の暴露の物語が、主流をなしていることは言うまでもない。だからと言って悪人より善人への変身の物語が書かれていないわけではない。だが少なくともこういう物語では、悪行にひたつていた人間が悪より足を洗つて善人の仲間入り

をするという、つまりもはや悪は行なわず消極的善人に一時的か以後かになることによつて、善人たちの希望や願いの実現に加担することになるといふ役割、それも多くは脇役が与えられていることが多い。悪の遂行者が積極的な善の遂行者に変身する小説も可能であろうが、そういう小説では現代の読者を納得させるために、むずかしい工夫を要求することになる。これは現代の人間が性格を大幅に変えることは大変むずかしくほとんど不可能なことであると一般的に考えている証左でもあろう。せいぜい積極的に悪を行なう人間より消極的に善を行なう人間へ、というくらい性格の変革がよいところで、それ以上の性格的変身は、逆方向ならばたやすいが、困難な事柄だと現代人は考えているであろう。

だがマラマッドは『アシスタント』（一九五七）の中で強盗の片われを積極的な善人、それも聖人のなかの聖人に生まれ変わらせている。マラマッドが『アシスタント』の主人公にこのような大幅な変身を完遂させたのは、もちろん劇的な効果をねらつたのがその主な理由であろうが、作者の真意は、われわれ現代人はこの小説の主人公が最終的に達した段階までの自己変身が必要なのだ、と訴えることにあると言えよう。こういう厳しい変身による自己改造が人間に可能かどうかは別として、しかしながら、もし人間の性格の大幅な変革は不可能だと信念に固執し、この小説の主人公の自己変革の幅の広さを把握できないと、この小説の構想を見誤つてしまうことになる。

善を指向する性格と悪を指向する性格の二つに大ざっぱに分けたとして、善を指向する人間のもつ生まれながらの本質的な性格が時代によつて変わるわけではないし、また至高の善へと向かう性格と能力を開発する革新的な方法があるわけではない。ということは、こういう小説におい

では、昔の道徳規範が、昔の善の哲学が再提出されることになるのは当然である。新しいのは小説の舞台となる時代とその時代の個人の情況だけということになる。だがもし今は喪失してしまった昔の善の哲学が、昔の道徳規範が、人間にとって真に貴重なものであり、それを喪失してしまったがゆえに現代の社会が悪を増長し、善を窒息させているのだとすれば、喪失したそれらを回復することは必要な願いとなる。

マラマッドのこういう願いをこめた小説がそういう意味で昔の倫理を発掘するのはいたしかたない。読者をまるで老人のお説教を聞いているような気分にするのはいたしかたない。だが耳をすませて聴いてみると、マラマッドの説く善の哲学はあらゆる時代に不可欠で普遍的な哲学だということが分かる。

彼が説く哲学が古く見えるもうひとつの理由は、彼が現代の社会や人間の生き方を徹底的に批判し破壊した上に夢を築こうとするという、実現不可能ではあるが革新的ともいえる理論を説いているのではなく、現代の社会にしっかりと足を据えた上で、社会をよりよい方向に向けるには人間はいかにあるべきかを説いているからでもある。マラマッドは現在われわれが生きている地点より浮き上った不可能な理想を提唱しているのではなく、現在というこの時間的・空間的地点をどの方向に向けていったらよりアイディア的な社会が築けることになるか、その方向を説こうとしているからである。つまりマラマッドの説く哲学は現代が喪失しつつあるが、決して喪失してはならない貴重な指針の再獲得と復権を目差すだけでなく、その上にユートピアの構築を目差しているのだと分かる。とすると年寄りじみた説教は傾聴に値すると考えねばならない。タルムードも言っている——「若者は老人を馬鹿ではないかと思つてゐるが、老人は若者が馬鹿であることを知つてゐる」と。

マラマッドの目差す理想を描くのにニューヨークのユダヤ人はまことに望ましい状況にあつたと言える。つまり、ユートピア建立への指向と物質的豊かさ獲得へのはてしなき欲望との間の矛盾と葛藤を体験しつつある、アメリカという国のニューヨークという大都会に亡命してきたユダヤ人は。

長編小説『アシスタント』が愛についての物語であることに異論はあまるまい。強盗と放火と盗みとさらに「割札をしていない犬畜生」<sup>(1)</sup>「不潔なユダヤの糞つたれ野郎」<sup>(2)</sup>のような差別用語を用いたのしり言葉に満ちてはいても、また小説の中で愛がひとつも成就しないけれども。この物語は或る愛がどのように始まったかとか、どのような過程をたどったかというような愛の様相を描いたものでもないし、また愛の当事者の内面の感情の烈しさを描いた物語でもない。そうではなく、愛とはどうあるべきものなのか、またそうあるためには人間はどうあらねばならないか、さらにはそのためには人間は自らをどう成長させることが必要なのか、という理論を小説の形で描いた物語なのである。

## II

舞台は自由と機会均等の国アメリカ、時代は国が最盛期を迎え、すべての人が富の繁栄を享受しているように見られた一九五〇年代。そこに繁栄からとり残された墓穴のように暗い一軒のユダヤ人経営の食料品店がある。その店の窮乏の日常が描出された場面につづいて、何と貧窮の極みのこの店に二人組の強盗が押し入る場面へと移行する。強盗の一人はこれもアメリカの物質的繁栄からは生まれながらにはじかれ除け者にされた境遇を生きてきた孤児、フランク・アルパイン。

だがこういう場面描写ではじまった小説にもかかわらず、アメリカの

資本主義社会への拒絶や抗議は声高には語られていない。それらはほとんど語られていないと言つてよいと思われる。それはこの小説がアメリカの社会や政治・経済の機構を批判する目的では書かれていないからである。批判されているのはその社会に生きる個人たちで、せつかく自由と繁栄を手に入れた個々の人間が、さらに留まるところなく物質的欲望を肥大させ、その欲望の満足を求めて狂奔し、平和と愛と幸福の源泉である内面の豊かさを喪失しつつあることである。

強盗の片われであるフランク・アルパインは、良心をもつがゆえの悔恨に捉われ、罪を償なおうと、自らが強盗に押し入った食料品店にアシスタントとして半ば強制的に住み込む。だが彼は、作者がこの言葉にこめた意味でのアシスタントにはまだなっていない。したがって作者はまだフランクをアシスタントという言葉で表現しはしない。作者がフランクをアシスタントという言葉で表現しはじめるのは、小説も終わりに近くなってからである。ここにも作者のこの小説の題名に負わせた意味が汲みとれる。そこに達する以前のフランクは本当の意味のアシスタントではないと作者は言うのである。

フランクは生まれながらに巨大な良心を保有している人間と描かれるが、その描写と交互に孤児として生きてきた過程で身についた盗癖から抜け切れず、この食料品店から小銭をくすねつづけるさまが描かれる。だがもう一人の強盗仲間であるウォード・ミノグとは違つるのは、フランクは犯した罪の反省にひたることである。とはいっても彼の反省はきまつて自らの行為の自分に都合のよい正当化へと向かうことになるのだが――

When he felt pepped up about stealing, it was also because he felt

he had brought them luck. If he stopped stealing he bet business would fall off again. He was doing them a favour, at the same time making it a little worth his while to stay on and give them a hand. Taking this small cut was his way of showing himself he had some thing to give...<sup>(3)</sup>

フランクの自己正当化の理屈には、見つからなければ何をやるのも自由だ、という時代が助勢した風潮が根底にある。こういう作者が否とする行為はこの小説の中で他にも描写されているが、そういう悪の行為をモリス・ボーバーがフランクに語っている――

'I used to know grocers that they took out a quart or two cream from the top of the can, then they put in water. This water-milk they sold at the regular price.'

He told Frank about some other tricks he had seen. 'In some stores they bought two kinds loose coffee and two kinds tub butter. One was low grade, the other was medium, but the medium they put half in the medium bin and half in the best. So if you bought the best coffee or the best butter you got medium—nothing else.'<sup>(4)</sup>

巧妙な手段を用いて富を獲得し蓄積する人間を成功者とみなす社会は、このような行動様式を常習とする狡猾な人間を不可避免的に成育することになるというのである。モリスから協同経営の店を狡猾な手段で奪い取ったチャーリー・ソペロフの行為、「酔っぱらい相手の商売なんて」<sup>(5)</sup>とか「人間は愚かな生き物だ」<sup>(6)</sup>とモリスに非難させるジュリアス・カー

プの金もうけ第一の商売、「知恵が彼の固い頭の上を飛び越して行ってしまうのだ」とこれもモリスに言わせているサム・パールの賭博行為等は、作者の同種の考えの表明となっている。物質やサービスの交換原理に基いて巧みに立ち回り、多くの富を獲得、蓄積した者をより偉大な成功者と認証する資本主義社会の風潮は、社会をよりよい善への方向ではなくより悪の方向へと加速させるエネルギーとなっている、とマラマッドは言うのである。

自らのけちな盗みの行為を正当化しようとするとき、フランクがよりどころとするのも、「自分の分け前を貰っているんだ」という資本主義の交換の原則である――

He had nothing to be ashamed of, he thought—it was practically his own dough he was taking. The grocer and his wife wouldn't miss it because they didn't know they had it, and they wouldn't have it if it wasn't for his hard work. If he weren't working there, they would have less than they had with him taking what he took.<sup>(8)</sup>

フランクの合理化は、〈自分はこれだけ働いたのだからこれぐらいは受けて当然〉という、商品やサービスの交換の原則を基にしているのである。マラマッドの考える愛の規範はそれとは相容れないものだと分かる。確かに愛はどのような種類の愛であろうと、他人との隔たりや分離を意識した行為である、交換という行為とはまるで異ったものである。それは隔たりではなく近親を、分離ではなく一体感を深める行為である。フランクの合理化は、したがって、資本主義的な観点から見れば頷けるところもある行為であるが、愛によってフランクと向き合っている

モリスの行為とは噛み合わない低次な行為であるとマラマッドは言うのである。こういう合理化が恐ろしいものであるとマラマッドが言うのは、こういう合理化を導き出す資本主義が内在する危険が、この世から愛を消滅させ、人間と人間の関係において疎外を究極まで押し進めてしまうことになるというのである。

ヘレンにとってナット・パールもルイス・カープも、この価値の交換という原則に立てば、決して不利な結婚相手ではない。しかしこれら二人の男性をヘレンに拒絶させることによって、これは愛ではないとマラマッドは言っているのである。現代の結婚の一般的風潮を、(とくにユダヤの Arranged Marriage は)の交換という原則の上に立つものであるにもかかわらず)ユダヤ人作者マラマッドは拒絶するのである。マラマッドは資本主義の原理は愛においては行使してはならないものだと考えていることになる。したがってフランクとヘレンが将来において、資本主義社会における物質的繁栄へと向かうことを示唆して小説の終わりとしてはいい。お互いに大学教育という言葉で象徴される内面的豊かさを獲得し、それによって疎外や差別のないより高次な社会を築き上げる先駆的ヒーローとしての役割を担わし得るにふさわしい人間へと成長していくところで、作品を終わらせている。

フランクが将来就くべき職業は方向づけられてはいない。ただ将来社会福祉の職か教職に就きたいと自らは希望しているヘレンに、フランクの将来の職業として科学者を希望させている。科学者というのは資本主義の経済活動、つまり交換をいかに巧みに自分に有利に行なうかという競走行為を避けつつ、この資本主義社会の中で愛ある人間として矛盾することなく生きて行ける職業のひとつであると作者は考えるのであろう。マラマッドが資本主義に代わるより理想的な社会を提示し得ないとすれ

ば、あるいは前述したように今現在のこの社会をいかにより良い社会に改革して行ったらよいかという、地に足を据えた、すぐに実行に移し得る理想を説いているのだとすれば、フランクにこういう職業を選ばせる必然があったことになる。果たせはしなかったが、薬剤師という職業で身をたてたかったというモリスのかつての希望も、同様な必然のひとつであると言える。

フランクは自らの行為をサービスの交換の原則に基づいて都合よく合理化し得ても、自らの良心を納得させることはできず、きまって罪の意識に苦しむことになる。くすねた金をいずれ返そうと記録さえとっているのも、合理化に信を置けないでいる証拠である。作者は自らの合理化に納得できず、罪の意識と告白への欲求に苦しむフランクの描写をしつこいほどくり返している。そのたびにフランクに深い反省に陥らせ、良心に従って生きる決意をくり返させることによって、その難しさを語っている。

### III

反省というのは自らの墮落した行為の正当化のためのものではない。それは自らの行為を悪であったと認識する、全き良心に基づいた精神の働きである。したがって反省は良心を持つ者にとって不可避的に自らの行為の正邪を問う行為となる。また反省を行なう者は、良心の保有が欠くべからざる資格となる。

だがマラマッドは、この小説の中で、良心を保有してはいてもそれが必ずしも悪行への走向を完全には阻止する力とはなり得ない、と語っていることになる。まさに全身良心そのものの具現化であるモリス・ポーバーでさえも保険金目当ての放火未遂の罪を犯す、と描いているからだ。

人間の情況、個人を追いつめる苦境が人間を悪の行為へと走らせることがある、と言っているのであり、またこのモリスの放火未遂の場面は、小説のはじまりの場面でのフランクの強盗行為をいささか弁護する場面ともなっている。

この小説の中で生まれながらに良心を保有していると描かれている人物は、モリス、ヘレン、フランクの三人である。この道徳的な小説の中でこの三人が、作者の理想を体現できる資質をそなえた人間である。しかしこの資質をそなえていることは、作者の理想を具現化するための必要条件ではあるが、十分条件まで備えていることにはなっていない。それについては後述するつもりである。

善良であり、正直であるためには、良心を保有していなければならぬ、それらの性質は、良心の表現なのであるから、というのである。

He laboured long hours, was the soul of honesty—he could not  
escape his honesty, it was bedrock.<sup>(9)</sup>

娘ヘレンにこのように評されるモリスは、まさに正直の権化、良心の化身として描かれる人物で、良心に恥じない生活と行動の重要性をフランクに教導する役目を負わされている。

ヘレンは心の遺産の多くを両親のおのおのから受け継いでいる娘として描かれている。母親アイダからはいざれば彼女の心に大きな葛藤を惹起する源となる欠陥を、父親モリスからは良心を。彼女はこの小説の中で嘘をつかない人間として描かれる一人であるが、資本主義社会で典型的な成功者となりつつあるナット・パールが、ヘレンの良心の保持を見抜いている。

'You've got some old-fashioned values about some things. I always told you you punish yourself too much. Why should anybody have such a hot and heavy conscience in these times? People are freer in the twentieth century. Pardon me for saying it but it's true.'

ヘレンが処女を与えた頭のよいユダヤ人の青年ナットは、ヘレンの性格の芯にあるものを見抜いていて、ヘレンの良心を揺さぶり倒壊させることによって、ヘレンとの肉体関係を継続させようとする。ヘレンの良心は成功への階段を登りつつあるこのハンサムな青年の言葉にぐらつきはするが、決して倒壊するほどの震動を起こすには至らない。

ナットのヘレンに対する評は、当然作者の理想の裏返しである。優秀でそれなりの努力もし、富と地位の獲得というこの社会での成功を手にしつつあるナットの価値感と生き方の表白をここで彼にさせることによって、作者は物質と地位の獲得のみを成功とみなし、とめどもなくそういう欲望の満足へとなだれをうって傾斜していく現代の人間の風潮を批判し、彼らに警告を発しているのである。

「ぼくは正直者です」としばしば言う人間が本当に正直者であるのは疑わしい、というのは常識であろう。

'I know I am a stranger, but I am an honest guy.'

'I am as honest as the day.'

フランクは小説が四半分も進行せぬうちに、三度もこのように自分を

売り込む。とくに「白日のように正直です」という言い方は、読者にフランクが嘘つきであることを強く印象づけすぎるくらいがあつて、フランクの性格が作者の意図するところでは肯定的なものであるのを、あるいは肯定的なものへと変革してゆくのを読者に見失なわせて、彼を否定的な人間として印象づける危険がある。

フランクがこの物語で悪の代表として登場させられているウォード・ミノグとまったく違うところは、たとえ二人で強盗に押し入ったにしても、フランクは反省をし罪を償なおうと試みることであり、ウォードには反省とか贖罪とかいう意識が完全に欠落していることである。つまり作者は、ウォードは良心が内部に存在せぬ人間であるのに反して、フランクは内部に巨大な良心を賦与されている人間である、と言っているのである——フランク自身に言わせているのであるが、フランクがしばしば口にする「私は正直者です」という意味の言葉は、正直者になりたいというフランクの希望を表わすものとして描かれているのであろう。小説の始まりから終りへと至る過程で、強盗の片われから聖フランシスへと大変身を遂げる人間が善への指向をまったく持たず、悪に満足してひたきっている人物であるなどというセンチメンタルな意見を作者は被歴してはいないのである。むしろ生まれながらに巨大な良心を持ちながらも、環境の犠牲者となつて善へと向かう性向を窒息させられ、悪へと向かつてしまうこともある、と語っているのである。

フランクは後悔に苛まれ、罪の償いを求めて強盗に押し入った閉店中の店を、「両手を額に当てて陰を作り、窓ごしに覗きこんで、ため息をついた」<sup>(13)</sup>り、「他人には聞こえない声でひとり言をつぶやいている」<sup>(14)</sup>姿をサム・パールに目撃されるが、この場面はフランクがこの小説にフランクという名前が登場した最初の場面であるので、作者は彼の強盗行為

ではなく良心の葛藤による悔恨と罪の償いの姿勢をまず描くことによつて、彼が善人になる資格をそなえた人間であることを読者に印象づけようとしていることになる。いやそれだけではない。それにつづく場面では描かれるのは、フランクがアッシジの聖フランシスの生き方に深く傾倒している場面である——

'No, it's St Francis of Assisi. You can tell from that brown robe he's wearing and all those birds in the air. That's the time he was preaching to them. When I was a kid, an old priest used to come to the orphans' home where I was raised, and every time he came he read us a different story about St Francis. They are clear in my mind to this day.'

'Stories are stories,' Sam said.

'Don't ask me why I never forgot them.'

Sam took a closer squint at the picture. 'Talking to the birds?'

What was he—crazy? I don't say this out of any harm.'

The stranger smiled at the Jew. 'He was a great man. The way I look at it, it takes a certain kind of nerve to preach to birds.'

'That makes him great, because he talked to birds?'

'Also for other things. For instance, he gave everything away that he owned, every cent, all his clothes off his back. He enjoyed to be poor. He said poverty was a queen and he loved her like she was a beautiful woman.'

Sam shook his head. 'It ain't beautiful, kiddo. To be poor is dirty work.'

'He took a fresh view of things.'

この場面はまたこの小説において、フランクという登場人物がはじめてする会話での一連の言葉でもある。読者に彼がまだ強盗の片われであることを知らさぬうちに——たいいての読者は彼がそうであろうと推量はするであろうが——作者はフランクが聖フランシスに深く傾倒している人間であることを示すのである。

フランクによる聖フランシスの説明には、作者の主張する愛に不可欠な要素が四項説かれている——博愛、富に執着しない生き方、勇気の所有、生まれながらの良心の所有、が。したがってフランクはこれらの要素すべてを所有していないにせよ、それらを得たいと望む人物として小説にはじめから登場してくるのである。だが小説のはじめにおいては、フランクにとつて聖フランシスは高根の花である。彼が聖フランシスと共有しているのは良心とまだ不完全な勇気だけだと作者は言うのである。

作者がはじめて描くフランクの良心の痛みと葛藤は、強盗という犯罪を犯したことによる罪の意識から生じたものではない。彼は強盗の罪の償いのためと働きはじめたモリスの店のレジから今度は小金をくすねるというけちな悪行を犯すのだが、その行為に対する良心の葛藤と罪の意識に苦しむさまがまず描かれるのだ。読者はまだフランクの最大の悪行である強盗行為については知らされていないことをはっきりさせておく。

しかしフランクの良心の葛藤による反省は、例の資本主義のサービスの交換の理論をもち出しての、自らのけちな悪行への合理化へと向かう。だがこういう合理化には結局信を置けず、後悔にふたたび苛まれ、「自分がなしている悪行のすべてを反省し、正しい方向に自らを向けようと



誓う<sup>(16)</sup>」さまが描かれる。このようにフランクがたとえ小さな悪を犯してはいても、善人であり、善人になることを渴望している人間であること、をくり返し述べた後で、はじめて彼が強盗の片われであったことが明らかにされるのだ。これは作者の工夫した構成で、フランクを作者の理想とするヒーローにいずれ変身させるために、読者に消しがたい先入観を与えることを避ける目的で考えられた構成上の技巧のひとつである。これ以後の場面でも小説の後半に至るまで、フランクは悪行と完全には訣別できず、自らの悪行を合理化しようとし、それに満足せず良心の痛み、に苦しみ、反省の末に正直に生きようと心に誓うが、なかなか決意通りに実行はできない場面描写がくり返し行なわれている。

強盗をして奪った金をひそかに返却する行為、あるいは押し入った店でひそかに働くことによつて店の主人がこうむった肉体的・経済的損害を償おうとする行為は、やはり資本主義経済の物質やサービスの交換の原理に基づいた行為である。罪の行為を行為者自身が自らの心の問題として心の芯で十分に捉えていないことになる。「おまえも罪人なんだ、おれと同じな<sup>(17)</sup>」とウォードに言われて「分かっている<sup>(17)</sup>」と答えはするが、フランクは法律的には確かにウォードの言う通りではあつても、精神的には異種類の人間である。「良心を静めるために」強盗をして奪った七ドル半を店のレジに戻しはするが、彼の心の平安はそれでは取り戻せないというのだ。告白をして罪の許しを乞うところまで行なわない限り、彼の良心の休息ははじまらないと作者は言うのである。

So the confession had to come first—this stuck like a bone through the neck. From the minute he had tailed Ward Minogue into the grocery that night, he had got this sick feeling that he might some

day have to vomit up in words, no matter how hard or disgusting it was to do, the thing he was then engaged in doing.<sup>(19)</sup>

この告白の強制は、ヘレンを愛するようになったことによつてますます苦しい強迫観念になつて彼を攻め苛むが、告白の実現は容易なことではないと作者は描く。反省によつて完全なる善への指向が定まったとしても、さらに告白によつて生じる不幸を耐える勇氣が必要だと言つてある。

フランクが孤児として生きてきた過程でいかに追いつめられた苦境の中での生活を強いられてきたかは、この小説の重苦しいトーンとなつてモリスの人生の同じ重苦しいトーンと響和している。フランクが孤児として生き伸びるためになさねばならなかった悪行の数々は具体的には描かれてはいず、フランクの身を置いてきた環境がひどい悪臭の立ち込める環境であり、その中の悪行であると表現され、彼の鼻がつぶれているのはこの悪臭の中を這い回つてきた過去の生活の象徴的な姿だとほめかされているだけである。

自らの内部の良心の存在を自覚し、それを土台に据えた生活に踏み出すと希求しながらも、悪行から脱却できぬフランクが、彼の希求する善の方向へと大きな一歩を踏み出すきっかけとなるものとして作者は二つを挙げている。ひとつは孤児であるフランクに欠けていた家庭のしつけである。並んで家業に励みながらモリスは、まるで父親が息子に話すようにフランクに話してきかせている——

'My father used to say to be a Jew all you need is a good heart.'<sup>(20)</sup>

これは親から子へ、子からまたその子への訓導である。ユダヤ人モリスはさらに言葉をついで、「最も大切なのはトーラで——ユダヤ人はトーラの律法を信じなければいけないんだよ<sup>(21)</sup>」と話す。しかしフランクにモリスの日常がトーラに即したものでない例をいくつも指摘されて答える言葉に、モリス——作者——がアイザック・ドイッチャーの言う〈非ユダヤ的ユダヤ人〉の一人であることが示される——

'This means to do what is right, to be honest, to be good. This means to other people. Our life is hard enough. Why should we hurt somebody else? For everybody should be the best, not only for you or me. We ain't animals. This is why we need the Law.'<sup>(22)</sup>

作者は——宗教的信仰の喪失と共に——失われてしまったユダヤの道徳律を回復しなくてはならないと叫んでいることになる。

フランクはおそらく生まれてはじめて父親の慈愛をもって自分を気づかってくれるモリスより、動物としてではなく人間として生きるすべを教えられるというのである。

「ヘレンが近くにいるとますます後悔がつ<sup>(23)</sup>のる」と表現されているが、フランクが良心に基づいた生活へと方向転換を行なうきっかけとなすもうひとつは、フランクのヘレンに対する愛である。彼は以後ヘレンとモリスより理想的ヒーローとして自己変革を遂げるために必要なものを学び身につけていくようすが描かれるが、ヘレンへの愛によって必要なものを自発的に獲得していくことにもなる。

#### IV

これほどの巨大な良心を持ちながら、たとえ環境の犠牲者にせよ、フランクがなぜ悪行から足を洗うことができないでいるかを作者は暴いていくが、作者はその原因をフランクのパーソナリティの未発達に置いている。孤児なるがゆえに両親による愛と薫陶を受けつつ生育する機会を欠いたまま大人になってしまったことを、その大きな原因のひとつとしている。したがってモリスの店でフランクは、遅くはあるがこの薫陶の機会が与えられていて、事実フランクは、この店とこの家の者たち、とくにモリスとヘレンより、彼に欠けているいくつかの資質を学んでいくことになる。それらの資質はみな作者の理想とする人間であるためにフランクが欠いてはならない資質であると描かれているが、したがって完全なる発達を遂げた人間のパーソナリティにとって必要不可欠の資質だと作者は言うことになる。

「悪いことをするときだつてぼくは善良なんだ<sup>(24)</sup>」とフランクはヘレンとの仲がうまく行きはじめたときヘレンに話すが、フランクが善良であろうとしながらも結果的にそうなれないでいる原因となっている彼に欠けた資質のうち、ヘレンから学ぶものが一つある。それは「何をぼくたちは待っているんだ<sup>(25)</sup>」とフランクがヘレンに肉体関係に入ることを迫るときに、ヘレンが拒否する理由を説明する言葉の中に示される——

'I want to be disciplined.'<sup>(26)</sup>

この言葉に対してフランクは、とっさに「くだらん!」<sup>(27)</sup>とは言うもの

の、自分に欠けていた資質のひとつが規律であることを知り、「自分を規律ある人間として思い描き、そして自分がそうであつたらよいのにと願う<sup>(28)</sup>」のである。願いは反省へと導びかれて、過去にいかにもその願いの実現が困難なことであつたかを、後悔と異様なほどの悲しさで回想する場面へと連なる。その後しばらくたつてからも、フランクは「自分に規律を持たせたい<sup>(26)</sup>」というヘレンの言葉を思い出して感動し、「欲する通りに事を成すことができ、欲すれば善を成すことができる人の美しさ<sup>(29)</sup>」に思い至り、深い反省に陥つては罪の告白による身の浄化と善の施行を強く志向するようになっていく。人間の生活が破壊され、無秩序となり、理想へと向かわない原因のひとつは、規律を欠いていることにある、と作者は語っているのである。

小説の前半で「やつらはぼくの神経に障わる<sup>(30)</sup>」と言つてフランクは、苦しみに耐えて生きているユダヤ人たちに嫌悪な感情を抱く場面があるが、それは彼が持ちたいと願ひながらも持つことがむずかしい資質——苦しみに耐える忍耐力——を彼らが持っているからである。フランクがモリスから学ぶことのひとつはすでに述べた（正直に生きること、つまり良心に従つた生活を送ること）であるが、他のひとつはこの忍耐である。

フランクはモリスの店をはじめ訪れたときに、自分の孤児としてのそれまでの人生について話したあとで、「自分はものごとが自分にとつてうまくいくようやり方をしばしば変えようとしてみたが、どのようにならなければいいか、そうしようと思つておるときでさえも、分かつていない<sup>(31)</sup>」と言ひ、その原因を「最もそれを必要としているときに、自分の内部にあるいは自分に原因があつて、何か欠けているんです<sup>(32)</sup>」と

説明している。つまりフランクは自分には欠陥があることを理解していることになる。しかも彼はその欠陥が何であるか、ある程度分かつてさえているのだ。

I am too restless—six months in any one place is too much for me.  
Also I grab at everything too quick—too impatient.<sup>(33)</sup>

だがフランクはまだ忍耐力を持つ人の中で暮らした経験がないので、正しい人生を送るために不可欠な忍耐を、偉大な事を成すに不可欠な忍耐の力を、理解していなかったというのだ。フランクはモリスと共に暮らし働らくことによつてそれを学ぶのだが、モリスとの初めての会話の中で、せっかちにモリスに解答を求めている——

He waited for the grocer to reply—to tell him how to live his life.<sup>(34)</sup>

だが忍耐というものの性質と有効性は言葉で説明して理解されるものではない。いかに生きるべきか必死に知りたがつてはいても、フランクには聖フランシスという本の中の聖人しかモデルがないのだった。目の前で生きつつその生きざまをもつてそれを示してくれる人間はいなかったというのだ。つまり孤児である彼には規範となるべき父親の像が不在だったというのだ。

現代社会が置く価値基準は人間の忍耐心の獲得を妨げている、とも作者は言っているようである。二分の一の時間で目的を成し遂げる機械や方法があるとすると、その機械や方法に少なくとも二倍の価値を置こうとする経済基準をもつ社会に生きている現代人にとつて、忍耐はますます

す身につけるのがむずかしい資質であることは間違いない。人間の価値基準も経済における価値基準と同じ物差しで計られ、スピードの早いという性質をもつことで、機械の質も人間の質もよいとの論理へと進むことになる。ここにもフランクの強盗という行為によって、一挙に経済的な繁栄を手に入れようという行動を生み出すことになる要因のひとつがある、と作者は言うのであろう。

フランクはモリスと共に生活し、労働することによって、「彼の忍耐の重みは今ではとうていアイダには太刀打ちできなかった」<sup>(35)</sup>と表現されている忍耐の力を学びとり体得していくさまが描かれる。こうして、小説が後半の四半分あたりまで進行した場面では、ヘレンへの愛も、今は一人で切り回す店の状態も、先の見えぬ暗黒そのものの出口のない苦境の中<sup>(36)</sup>にいるようになるが、そのときでさえ「今度ばかりは踏み留まろう」と考え、事実そうできるほどの忍耐力を体得した人間へと生長している。

この小説の中で作者が肯定的に描いている人物が三人——フランク、ヘレン、モリス——いると前述したが、三人のうちフランクがこの小説の主人公であることは間違いない。それはフランクだけが、小説の終章で、完全に作者の理想を体現する人物にまで成長した人間となっているからであるが、小説の後半に至るまでは、彼は他の二人より低次の段階にある人間として描写されている。彼が他の二人と違うところは、彼が人間として重要欠くべからざる資質を学び、身につけて、完全なる人間に成長していくところにある。ヘレンとモリスは物語の進行の途中で何かを学んでいくことはほとんどない。特にモリスは、小説の進行につれて善への指向、愛の表白、勤勉という肯定的な性向より退却して

いくさまが描かれている。そして死んで埋葬される場面、彼の墓穴に落下したフランクがそこから這い上る場面、フランクとなって再生したことが示されてその役目を終えている——この場面ではまた、フランクの、墓としてのモリスの店からの未来における脱出も暗示されているのであるが。

ヘレンはフランクへの愛によって上昇傾向を示すこともあるが、公園でフランクとはじめて肉体交渉をもったとき、突如、大幅の退歩を見せ、物語の終章に至るまで理想に反した低次の思考や行動の状態に引き籠った生活へと退行してしまう。ヘレンのこれら首尾一貫せぬ言動はこの小説の不可解な部分のひとつに見えるかもしれないが、作者はここに大きなテーマをひそめているのである。それについては次号にて説明する予定である。

## V

あれほどの良心、あれほどの忍耐を所有し、フランクにまるでわが子に与えるような慈しみを与えるモリスを、作者は完全に肯定的な人間として描いているわけではない。実際モリスは苦境の中で、忍耐も他人を慈しむ性向をも磨り減らし、ついには放火未遂の罪まで犯し、最後には生きる気力をも喪失してしまうというように、フランクとは逆の方向、つまり聖人より凡人へと退行していく人物として描かれている。

Life was meagre, the world changed for the worse. America had become too complicated. One man counted for nothing.<sup>(37)</sup>

モリスはこのように自分の人生が貧しく苦境の連続であった原因を世

界とアメリカに置いていて非難を浴びせているが、これは作者がモリスの口を借りて現代の社会やアメリカという国の現状を非難しているといふよりはむしろ、モリスのいたらなさ、欠陥を表現しているようである。では作者はモリスがあのように苛酷な運命をたどらなければならなくなった原因をどこに据えているのであろうか。

作者は確かにモリスをまことに欠陥の少ない人間と描いているのだが、ただひとつの欠陥をモリスに与えて、その欠陥により彼の願望の成就も愛の完成も不可能とされている、と描いていると考えられる。この小説で他人を洞察する能力を最も豊かに賦与されているヘレンがここでもそれを見抜いて語る役目を負わされている――

He was no saint; he was in a way weak; his only true strength in his sweet nature and his understanding. . . he didn't have the imagination to know what he was missing. He made himself a victim.<sup>(38)</sup>  
He could, with a little more courage, have been more than he was.

勇氣とは上昇を求めて危険を犯す能力であり、それによって身に振りかかる苦痛や期待はずれにも耐える能力であるとすれば、この小説の終りの時点に至って、フランクのみがその能力を完全に獲得しえた人物として描出されていることになる。モリスとフランクの違い、フランクが所有でき、モリスが欠いていた能力はこれである。この能力を欠いているがゆえにモリスの所有する岩盤のような忍耐力という長所も生きないことと作者は言うのである。つまり作者は忍耐には二種類あると言っていることになる。外圧にひたすら耐える忍耐力と自らが積極的に事を成すに必要な忍耐力とである。消極的な守りの忍耐力と積極的な攻めの忍耐

力と言いかえてもよからう。モリスが前者を過剰に所有していることは間違いない。しかし彼は後者の忍耐力を発揮できる情況に身を置くことから避ける人生を歩いている。

モリスは人生でただ一度、勇氣が必要な事態に遭遇したことがあった。ユダヤ人迫害が熾烈となりつつあったロシアで、皇帝の軍隊に徴兵された日に、逃亡しアメリカへと亡命を計ったときである。しかしそれもすべて自分の意志で計画し、実行したのではなく、父親より命令され、方向を示され、策を授けられて、その通りに実行しただけである。

彼は職捜しに出掛けたニューヨークの通りで「方向を選ばねばならぬ必要に迫られて圧倒され」、戸惑い、自分は「背中に吹きつけてくる一切のものに追いつて立てられて動き回る犠牲者」だと感じる。これにつづく描写で「彼は進んでいるのではなく押されているのだ。犠牲者なりの意志はあるが、意志と呼べるほどの意志はない」とも描かれている。<sup>(41)</sup>勇氣のない者はたとえ大きな忍耐力を所有していても、それを前進のための忍耐力としては行使できず、したがって未来の可能性を実現するための方向さえ決めることができないうのである。こうして善人の見本ともいえるモリスは小説の終わる直前に、与える愛も磨り減らし、正直さからも立ち除き、生きる意志も妻や娘に対する責任も放棄して、墓へと急ぐことになる。

死の直前のモリスに作者が言わせている、注(37)に引用した言葉は、作者の言わんとしていることとして、そのまま受け取るべきではない。確かに世界は、アメリカの社会は、悪い方へと向かいつつあると作者が考えていることは間違いないが、そういう方向に向かいつつある社会をいかにしたらよりよい方向に向けることができるかというひとつの解答を、この小説で提出しているのであり、そのためには人間一人ひとりはどう

あらねばならないかを提示しようとして試みたのがこの作品なのであるからだ。したがって理想的な人間であるためのひとつの資質である勇気を欠いたモリスは、たとえ巨大な良心と忍耐力を授けられてはいても、敗北し、低次元へと落下しつつ生涯を終える人間として描かれることになる。安全と無事を第一にし、薬剤師になる勉強を途中で放棄し、手を伸ばせばすぐにつかめる食料品店という、彼の性格には合わぬ職業に入り込んでしまったモリスに欠けているのは、まさにこの能力だと作者は言うのである。モリスの役割は、フランクに親のような慈愛と薫陶を一時期与えることにあるのであって、この小説においてはヘレンに次ぐ第三位の役割を負わされているキャラクターといえよう。

ここでフランクとヘレンが勇気をもつ人間として描かれているかどうかについて少々触れておきたい。

まずフランクであるが、彼が勇気をもつ人間であるかどうかは、小説のはじまりの部分ではあまり明らかにされてはいない。しかし彼が勇気をもつ人間に憧憬を抱いている人間であることが、小説に登場しての彼のはじめて交す会話の中に描かれる――

..... it takes a certain kind of nerve to preach to birds.<sup>(42)</sup>

この言葉は、聖フランシスのような完成した愛を所有するためには、勇気という能力をもつことが不可欠であると語っている言葉でもある。

フランクはモリスと違って、前進しようというやみがたい渴望を募らせ、それを実行しようと努力するさまが描かれていることから、彼が生来勇気もちうる人間として描かれていることは理解できる。それに彼は自分に欠けている他の重要な資質とともに勇気をもつことの必要性

と重要性をさらに自覚していくが、彼がこれを自覚するのは主として読書を通してである。

ヘレンに半ば強制されて、彼女より与えられた小説を読み終えた後で、彼は勇気をもつことの重要性と必要性を読みとっている――

Anyway, he could not get out of his thought how quick some people's lives went to pot when they couldn't make up their minds what to do when they had to do it.<sup>(43)</sup>

また彼が好んで読む本は偉人の伝記であると書かれているが、彼のこの読書を通して上昇の意志を補強し、それを実行する勇気の必要性を読み取っていると語っているようである。モリスが偉大な生を生きることに失敗したのはこの資質を欠いていたからであり、フランクはこの能力を読書と経験を通して確固なものとしていくことで、自らを愛の聖人へと完成していくのである。

こうしてフランクは、最終的には、勇気をもつ者にのみ可能な行為のひとつである自らの罪の告白をモリスとヘレンにするに至るのだが、小説の終りに近いその場面は、作者の回復を叫ぶ人間として重要な能力・資質――規律、忍耐、勇気、他人への尊敬等――をフランクがほぼ完成させたこと、つまり彼がほぼ完成された人間として自己変革を遂げたことを示す場面ともなっている。

ヘレンもまた勇気をもつ人間と描かれていることは間違いない。フランクを愛していることに気づいたヘレンは、異教徒であるフランクとの結婚に関して予想される両親の反対に対抗するために、勇気が必要だと思いついている――

The future offered more in the way of realizable possibilities.  
Helen thought, if a person dared take a chance with it. The question  
was, did she?<sup>(注)</sup>

勇気とは上昇を求めて危険を犯す能力であり、それによって身に振りかかる苦痛や期待はずれにも堪える能力である、と定義したが、ヘレンはここでこの能力の有無を自らに問うていることになる。モリスは自分の欠陥が勇気を持っていないことである、と気づいていなかった。それゆえ自らの人生が苦境の連続という経過をたどることになってしまいう原因に思い至ることができず、結局その原因を社会のせい、アメリカという国のせいにする以外に理由を見つけれなかった。つまり勇気を欠いた人間は、自分が勇気を欠いているがゆえに、自らの人生を生産的、上昇的にすることができないのだということに気づかないというのである。勇気のある人間のみが、ときに、勇気の有無を自らに詰問し、勇気を奮い起こそうと試みるのであり、また他人の勇気の欠如をも洞察することができる、と言うのであろう。とすれば、「自分にその勇気があるであろうか」と自らに問い、またモリスの欠陥は勇気がないことだと見抜くヘレンは、勇気を十分に所有した人間として描かれていることになる。

自分の人生を意義あるものに高めたいと切望しているヘレンは、大学教育を何としても受けるという目標を保有しつつ、遂にはそれを実現させさえる。財産の保持を約束するナットやルイスとの結婚に逃げ込むことなく、不確実な未来の可能性を選んだことでもヘレンが大きな勇気をもつ人間であることを示していることになる。彼女はこの小説が終ってから大幅な成長の余地を予想させる人物である。彼女はフランク

につづいて自己変革を果たし、この複雑ですべてを物質という物差しで計ろうとする社会に、「新しい物の見方」で対抗していくことが暗示されている人物である。そのためには巨大な勇気を保有していることが必要なキャラクターなのである。ただ彼女にはひとつの欠陥があって、勇気の発現をとくとして阻害されていると描かれているのである。  
(以下次号)

## (注)

- (1) Malamud, Bernard, *The Assistant* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1957), P.168. ('Dog — uncircumcised dog?') (以下マラマッドの『アシスタント』からの引用はすべて本版による)
- (2) Ibid., P.26. ('Your Jew ass is bad.')
- (3) Ibid., P.85.
- (4) Ibid., P.84.
- (5) Ibid., P.9. ('A business for drunken bums.')
- (6) Ibid., P.17. (Der olem iz a golem)
- (7) Ibid., P.18. (Wisdom flew over his hard head)
- (8) Ibid., PP.68, 69.
- (9) Ibid., P.16.
- (10) Ibid., P.109.
- (11) Ibid., P.40.
- (12) Ibid., P.56.
- (13) Ibid., P.29. (... shading his brow, stare through the window, sighing.)
- (14) Ibid., P.29. (... muttered inaudibly to himself.)
- (15) Ibid., PP.30, 31.
- (16) Ibid., P.69. (... he felt very bad about all the wrong he was doing and vowed to set himself straight.)
- (17) Ibid., P.73. ('You are hot, the same as me.' 'I know.')
- (18) Ibid., P.73. (... to quiet my conscience.)

- (19) Ibid., P.89. (43) Ibid., P.108.
- (20) Ibid., P.124. (44) Ibid., P.134.
- (21) Ibid., P.124. ('The important thing is the Torah. This is the Law — a Jew must believe in the Law.')
- (22) Ibid., P.124.
- (23) Ibid., P.89. ('... When Helen was around he felt worse')
- (24) Ibid., P.140. ('Even when I am bad I am good.')
- (25) Ibid., P.138. ('What are we waiting for, honey?')
- (26) Ibid., P.140.
- (27) Ibid., P.140. ('Crap.')
- (28) Ibid., P.140. (He thought of himself as disciplined, then wished he were.)
- (29) Ibid., P.157. ('—the beauty of a person being able to do things the way he wanted to, to do good if he wanted;')
- (30) Ibid., P.88. ('... they got on his nerves.')
- (31) Ibid., P.37. ('I've often tried to change the way things work out for me but I don't know how, even when I think I do.')
- (32) Ibid., P.37. ('...When I need it most something is missing in me, in me or on account of me.')
- (33) Ibid., P.37.
- (34) Ibid., P.37.
- (35) Ibid., P.8. ('... the weight of his endurance was too much for her now.')
- (36) Ibid., P.192. (This time he would stay.)
- (37) Ibid., P.206.
- (38) Ibid., P.230.
- (39) Ibid., P.206. ('... overwhelmed by the necessity of choosing a direction.')
- (40) Ibid., P.206. ('... he felt ... the victim in motion of whatever blew at his back;')
- (41) Ibid., P.206. (He did not go, he was pushed. He had the will of a victim, no will to speak of.)
- (42) Ibid., P.31.